

司会の言葉

西村 恒彦*

循環器疾患の画像診断法として、現在心エコー/ドプラー、CT/MRI、SPECT/PETそして冠動脈造影などが用いられている。心機能、心筋血流の同時評価はコントラスト・エコー、造影MRIおよびGated SPECTを用いて精度高くなるようになってきた。これらの手法は、虚血性心疾患や心不全の診断のみならず、リスク層別化、予後評価に役立っている。また、心筋 viability 評価はFDG-PETがgold standardであるが、ドプラー・心エコー、造影MRIや^{99m}Tc標識心筋SPECTを用いて精度高い評価が行え、PCI、CABGの適応決定や治療効果の判定に役立っている。

しかし、冠動脈イメージングに関しては、長い間観血的な冠動脈造影が用いられているが、最近16列のマルチスライスCT (MDCT) やMRIを用いて非観血的に行うようになってきた。特に、急性冠症候群における不安定プラークの検出において、MDCTやMRIの果たす役割が益々重要になってきている。また、経胸壁エコーは冠動脈病変のスクリーニング検査として、パルスドプラ法と併せ有用なことが示されつつある。

このような非観血的な冠動脈イメージングの進歩は、虚血性心疾患の診断や治療にも大きなイン

パクトを与えつつある。CT/MRIを用いた冠動脈狭窄の検出精度の向上とともに、PCIやCABGを施行する症例のみ冠動脈造影を行う時代がくるかもしれない。また、CT/MRIを用いて狭心症や心筋梗塞の発症前に石灰化や不安定プラークなどの冠動脈硬化病変を検出することにより、スタチンを用いたコレステロール低下療法や生活習慣病の是正などの予防的治療法を積極的に進めていくことが迫られてくるかもしれない。

いずれにしろ、梗塞などの“できあがった病態”から冠動脈硬化などの“できあがる前の病態”に焦点が移りつつある循環器疾患の制圧において、最近の画像診断の果たす役割は大きいものと思われる。

本シンポジウムでは、この領域の第一線で活躍されている先生方に、各モダリティを用いた循環器画像診断の現状と将来、とりわけ冠動脈イメージングに焦点を併せ話題提供を行っていただいた。

この特集が、会員諸氏に少しでも役立てればと思います。また、このような機会を与えていただいた大会長の国立循環器病センター研究所 砂川賢二先生に深謝いたします。

*京都府立医科大学大学院医学研究科放射線診断治療学